Toyota City Museum
Of
Local History

豊田市郷土資料館だより

No.110

豊田市教育自主研究グループ（社会科）連携展示

縄文ライフ！

～SDGsの種（タネ）を探しに～

（エス ディー ジー ズ）

半蔵寺観音「守護寺」

目次

令和３年度企画展
「縄文ライフ！～SDGsの種を探しに～」 2

ビフォーアフター猿投神社　山中観音堂 3

斎木環と貴彦
ー明治初期のジャーナリズムを支えた
挙母藩士ー 4

令和２年度　文化財保護事業報告 6

令和２年度　郷土資料館事業報告 7

豊田市内に生息する魚類の
展示用標本が完成しました 8

ISSN 0919-0120
202107 No.110

令和３年度企画展

豊田市教育自主研究グループ（社会科）連携展示

縄文ライフ！ ～ＳＤＧｓの種を探しに～

令和３年７月６日（火）～９月 26 日（日）

縄文時代って？

縄文時代は、日本で約１万年以上続いた狩猟採集の時代です。この間には、最終氷期と呼ばれる寒冷な気候から温暖化が次第に進み、周辺環境に大きな変化が起こった時代でした。人々は、それぞれが暮らす周りの環境の中で、限りある資源を有効に活用して生きていました。

豊田市郷土資料館では、子どもたちが自身の暮らす地域をより身近に感じられるようにするために、平成 20 年度から学校教育と連携した「郷土学習スクールサポート」を進めてきました。（令和２年度実績：延べ 241 校・20,181 人）

さらに、企画展示を豊田市教育自主研究グループ（社会科）と連携して行う活動は、今回で２回目となります。前回は博物館が収蔵する歴史資料と歴史展示にどのような要素や演出が加われば、子どもたちの興味や関心を効果的に高めることができるかを検証しながらの試行的な実践でした。今回は新たな課題として「問いのある展示」を追究していきます。

〈「愛知やきものヒストリー 2021」と同時開催〉

ＳＤＧｓって？

ＳＤＧｓは、豊かな生活と環境のバランスを考えながら、これから私たちが生きていく世界をどうしたらより良いものにしていくことができるかについて、世界のみんなで行動していく国際目標です。「持続可能な開発目標（Sustainable Development Goals：SDGs）」と呼び、2015 年９月の国連サミットで採択されました。

縄文時代とＳＤＧｓ！？

縄文時代は、すごく寒いときが続いたこともあれば、だんだんと暖かくなり、海が広がってくるときもありました。さまざまな環境の変化があったでしょう。この電気もガスも水道もなかった縄文時代の暮らしを知ることで、より良い世界・暮らしをめざしていくためのＳＤＧｓの「ヒント」が、たくさん見つかるかもしれません。ぜひ、展覧会にお越しいただき、私たちと一緒にＳＤＧｓの種を探しましょう！

豊田市教育自主研究グループ（社会科）
代表 坂本 貴亮

（伊藤 俊満）

ビフォーアフター

猿投神社 山中観音堂

例年より１か月早い梅雨入りが発表された翌日、束の間の晴れ間となった５月 18 日の午前、猿投自治区を中心に 50 人近い市民の方々が山中観音堂を訪れました。

この日、今年３月に完了した猿投神社山中観音堂修理の現地説明会が開催されました。折しも、新型コロナウイルス感染症まん延防止による緊急事態宣言下。来訪者は屋外で充分な距離を保って参加し、かつ堂内では５人以内でご見学いただくこととしました。

修理後の山中観音堂

山中観音堂は、猿投神社の北東 300 ㍍に位置するお堂で、猿投神社の神仏習合の様相を伝える貴重な建造物です。一昨年、神社や自治区の皆さんから文化財課にお堂建替えの相談を受けたことが今回の修理のきっかけです。旧市内で最古の建物となるこのお堂を保存し後世に伝えるべく、関係者の間で協議を重ねました。そしてお堂は市指定文化財に指定され、文化財修理補助金の採択を経て、修理が行われることとなりました。

どこを修理したの？？

古民家再生やリノベーションなどの言葉は一般的によく聞かれますが、文化財建造物の修理とはどのようなものでしょうか。

保存と活用の両方の視点、また限られた費用でどのように修理するのか、山中観音堂を例にご紹介します。

今回の修理では、建物を解体し再建築することは行わず、床下・根太の補強と畳を入れ替えました。次に天井板や軒天など欠損部分の部材を新調しました。新調した部材には、今回の修理による部材であることがわかるよう焼印が施されています。次の時代へ繋ぐ工夫の一つです。

新調された部材（令和二年度修補）

あわせて、台風による倒木で曲がっていた正面の銅板屋根の一部も取り替えられました。

また、江戸時代に使用されていたと思われる格子建具が残されていたので、敷鴨居と格子建具を設置し、内陣と外陣を設ける間取りを復元しました。

古建築の修理では、その建物のいつの時代様相を再現するかということがポイントになります。今回は、このお堂が江戸時代に密教寺院のお堂として使われていたであろうことを前提に、その姿を可能な限り再現しています。

では、室町時代後期といわれる建立当時の様相はどうだったのでしょうか。

屋根は草（萱）葺で、秘仏である千手観音立像が安置されている厨子は、江戸時代中期頃の増築部分と考えられており無かったでしょう。堂をとりまく縁も、後世に増築されたものです。

このように、現在の使い勝手や、維持管理の負担が少しでも軽減され長く守り伝えられるよう考慮することも修理の重要な視点となります。

修理の詳細は今年度中に報告書としてまとめられます。報告書は未来の修理の際に役立つ情報として活用されます。

猿投神社山中観音堂には、今年１月に県指定文化財となった千手観音立像や、猿投神社ゆかりの仏像が安置されています。また弘法様をお祀りする札所としても活躍する現役の建物です。

身近な神仏に祈りを捧げる習俗は、コロナ禍の中で、日々の暮らしを大切にすることに通じます。私たちの子孫に、文化財を守り繋いでいくことの大切さを伝えていきたいと思います。　（梅村美紀子）

斎木環と貴彦 ―明治初期のジャーナリズムを支えた挙母藩士―

1　研究略史

平成 25 年に豊田市郷土資料館で開催された特別展「明治の傑人 岸田吟香」では、挙母藩士でもあった吟香（ぎんこう）の幕末・明治のエネルギッシュな活動を紹介しました。吟香は文明開化の象徴である民間新聞をジョセフ・ヒコと共に立ち上げた日本初ともいえる新聞記者で、東京日日新聞の主筆として「新聞は国家の耳目なり」と説き、日本初の従軍記者として明治 7 年（1874）の台湾出兵に同行したことなどはよく知られています。

展覧会図録では、挙母藩士斎木環（さいきたまき）に関する謎が残りました。明治・大正期の地元資料は、環は吟香に招かれて東京日日新聞の編集を補佐、後に日新真事誌（にっしんしんじし）の編集員となり、さらには新潟新聞の編集長になったと伝えています。英国人ブラック発行の日新真事誌は明治初期の有力紙、新潟新聞から続く新潟日報は現在も県下普及率 5 割を誇る有力地方紙です。『明治新聞雑誌関係者略伝』には「斎木環」ならぬ「斎木貴彦」の記事がありました。生没年・出身地は記されていませんが、日新真事誌記者（明治 8 年 1 月 4 日～ 12 月 5 日）、めざまし新聞記者、『新潟新聞』初代編集長として創刊準備から尽力などとありました。明治 10 年 2 月 22 日の『読売新聞』には、「舊日新眞事誌とめざまし新聞の編輯をされた齋木貴彦さんハ今度再興に成る新潟新聞の編輯長に成られて昨日東京を出立された」との記事があり、『新潟日報二十五年史』には「編集長に慶應義塾出身の日新真事誌記者斎木貴彦を迎え」とあります。しかし、「環」「貴彦」と名前が異なるため、両者を同一人物と断定することはできませんでした。

2　挙母藩士斎木環

環の生年は不明ですが、父親の斎木斎（いつき）は在府の挙母藩重臣で、慶応 4 年（1868）には留守居役として最後まで江戸藩邸に残っています。環は江戸藩邸で藩儒岸田吟香の門に入り文学を修め、父に先んじて挙母に帰着しました。吟香が挙母藩の江戸藩邸に居たのは文久元年（1861）10 ～ 12 月頃なので、環が吟香に学んだのはこの時だったのでしょう。明治 2 年には挙母藩公廨所の書佐に任命されるなど、文才に優れ作詩に長けていました。その後、明治 2 年廃止の藩校崇化館の系譜を引く皇道寮の筆道大教授（第 2 等／月給 7 両 2 分）に任命されていますが、同時期に軍団寮の大教授となった大見轍（おおみてつ）は、筆学を環の父の斎に学んでいて、大教授としての等級・月給とも環と同格です。おおよそ同世代と考えられる大見の生年、弘化元年（1844）は、環の年齢を考える際の一つの目安になります。

新聞『めさまし』第 1 号

明治 4 年 9 月に皇道寮が閉鎖される際に、斎木の名前は見当たりません（『挙母学校同窓会雑誌』第 18 号）。その後、挙母での斎木の記録は途絶えています。

3　「環」「貴彦」と岸田吟香の関係

藩士の環を貴彦と記した挙母の文献はありません。それでは貴彦の名はいつから登場するのか。今のところ東京日日新聞では確認できていませんが、日新真事誌では明治 7 年 12 月 30 日号に「編集印行 頭取 豹刺屈（ブラックの意）」とあるのに対し、次の明治 8 年 1 月 4 日号の編集者には「斎木貴彦」の名が登場、終刊となる同年 12 月 5 日号には「編集人長 斎木貴彦」とあります。明治政府がブラックの言論を封じるべく、明治 8 年 1 月から「左院お雇い」としたため、その代役として日新真事誌に迎えられたのが貴彦でした。ブラックと親交があった吟香は、明治 7 年 12 月に主筆を福地桜痴（ふくちおうち）に譲り、東京日日新聞は「論説の桜痴」「雑報（社会面）の吟香」の二枚看板となって紙面も刷新され、桜痴の社説欄がメインとなります。おそらく東京日日新聞の人事にも動きがあり、これらを契機として吟香がブラックに斎木を紹介したのかもしれません。

『朝野（ちょうや）新聞』明治 9 年 7 月 2 日号には、前年 6 月に成立した新聞規制法の弾圧に対抗すべく、浅草で開催された新聞供養大施餓鬼の様子が報じられ、そこに掲載された「めざまし新聞編集長斎木貴彦」の祭文には日新真事誌が休刊となり、今春「性モ懲リモナク」めざましを発行したとあります。『めさまし』第 1 号の日付は明治 9 年 3 月 28 日。貴彦の刊行の辞に続き、「一ツ祝ひませう」と祝詞を述べているのはなんと岸田吟香その人で、二人の仲が親密であったことを伝えています。ここに環と貴彦の接点を見出すことができそうです。

4　斎木貴彦の足跡

慶應義塾大学には文久３年（1863）から38年間の入門帳にあたる「入社帳」が保管、公開されています。明治14年３月までの記録を通覧しましたが、挙母では川西市彌（明治４年／士族／17歳／保証人中根謙享）と医学所入社帳に森波繁（明治10年／平民／17歳）の名前があるのみで、斎木の名前はどこにも見つけられませんでした。斎木は正式には入学しておらず、それ以外のかたちで慶應義塾と関係を持っていたのでしょうか。民間新聞の重要性を強く認識していた福沢諭吉が創設した慶應義塾は、全国の新聞社に主筆を送り出していて、貴彦の後に新潟新聞の編集長・主筆を務めた藤田九二（きゅうじ）・尾崎行雄・箕浦勝人（みのうらかつんど）などはみな慶應義塾の出身者です。新潟新聞の発行願を県に提出した鈴木長蔵が福沢諭吉と親しかったため、この関係性の中から経験豊かな斎木貴彦が評価されて新潟に招かれたと考える意見もあります（「藤田九二先生略伝」）。

また、貴彦が明治10年３月に刊行した『小学図解人身問対』という教育書の奥付に、「愛知県士族」と記されていることを、新潟日報論説編集委員室長の森沢真理さんから教えていただきました。本の内容は問答形式の平易なもので、「童子之輩にも読なんことを欲すれば」と意気込んで新聞発行に臨んだ吟香の影響も感じさせます。挙母の資料や吟香との親密性を考慮すれば、斎木環と貴彦は同じ人物だったと考えても間違いはないでしょう。

5　新潟新聞の斎木貴彦

先の生年の推測が正しければ、新潟に赴いた貴彦は、三十代半ば前後だったでしょうか。貴彦は明治10年４月７日の新潟新聞第１号に、「凡そ新聞紙なるものは（中略）有ものを有と記し白きものを白しと録す」と矜恃を見せています。『朝野新聞』の主力記者高橋基一（きいち）が「知友斎木君」と書き、第17号には戯作者として著名な仮名垣魯文（かながきろぶん）が斎木に祝詞を寄せていることから、貴彦が東京で広い人脈をつくっていたことがうかがわれます。

創刊の翌月頃に斎木は局長に昇格したようですが、６月には編集長が体調不良となり再びその任を兼ねています。11月６日には藤田が編集長となりますが、局長の貴彦は新聞規制法の取締りによほど嫌気が差していたのか、藤田の挨拶の後に「賢々明々ナル御役人様ノ五厄介ヲ蒙ムルガ如キ馬鹿ケタ日間ッ潰シ白痴ケタ狂言ノ任ヲ譲リマシタト此段御届ニ及ヒ候也」とかなり揶揄して書いています。明治８年に吟香が東京日日新聞の編集長を辞した際のとぼけた挨拶「私ハ元来臆病者で五座りますから、禁獄だの罰金だのが怖くッて怖くッて毎日びくびくして居ますから、今日から編輯長を免職いたしまして」を思い起こさせます。その後、「雑報記者ヲ以テ局長タリシ斎木貴彦は（中略）昨十一年六月ヲ以テ本社ヲ去レリ」（『新潟日報』明治12年４月８日）とあるので、１年余りで新潟新聞を退職したことになります。軽妙な文章を操った貴彦が「雑報」記者であったのは、やはり吟香に通じるところがあります。東京から送り込まれた地方紙の主筆が短期間で辞すことは珍しいことではありませんでしたが、斎木は明治初期の知識人として健筆を振るうとともに、県内士族や豪農らと「言志会」を結成し、民権や地方自治などを論じました。明治12年10月に主筆となった尾崎行雄は後に政界に転じ「憲政の神様」と呼ばれましたが、福沢に新潟行きを打診されたとき、「越後と云へば田舎ではあつたが、当時新潟新聞は地方新聞の雄（中略）私は勧められるまゝに、新潟行を承諾した」と回想しています（『咢堂自傳』）。文明開化の中を進む港町新潟に初めて本格的な日刊新聞をもたらし、「地方新聞の雄」と評された新聞の礎を築いた元挙母藩士の貴彦は、新潟の歴史に確実に足跡を残したと言えるでしょう。

斎木貴彦著『小学図解人身問対』

6　まとめにかえて

『めさまし』第１号を見ると、貴彦は「うづひこ」と読むようです。森沢さんからヒントをいただきましたが、『日本書紀』に登場する珍彦（うずひこ）は、神武東征に際して水先案内人の役を担っていました。斎木もまた新聞で筆を振るうことで、文明開化の案内人になろうとしていたのではないでしょうか。

挙母は岸田吟香、そして斎木環（貴彦）という初期のジャーナリストを２人も輩出したことになります。しかし、新潟新聞退職後、斎木の足取りはぷつりと途絶えます。斎木家は挙母藩の有力家臣だったにもかかわらず「挙母藩譜」に記載がなく、現在は墓所の所在も確認できていません。もっと斎木のことを知るために、引き続き調査を進めたいと考えています。（森泰通）

令和2年度　文化財保護事業報告

1　文化財保護審議会　２回
・（仮称）豊田市博物館整備事業の進捗について
・足助資料館の運用変更について　など
・文化財防火デー：如意寺・洞泉寺・隣松寺・楽圓寺

2　伝統的建造物群保存地区保存審議会　２回

3　埋蔵文化財保護の概要

○有無の照会・届出
・埋蔵文化財包蔵地（遺跡）の有無照会　578 件
（平成 30 年度　706 件、令和元年度　645 件）
・遺跡内での開発の届出・通知　合計 125 件
（民間 94 件・公共 31 件）
（平成 30 年度　132 件、令和元年度　116 件）

○調　査
・範囲確認調査・試掘調査など　12 件
・本調査　３件（下表）

表　本調査を実施した遺跡一覧

遺跡名（所在地）	調査原因	調査面積（㎡）	主な遺構
高橋遺跡（高橋町）	宅地造成	800 ㎡	近世溝
寺部遺跡（寺部町）	区画整理	100 ㎡	近世溝・ピット
伊保古瓦出土地（保見町）	学術	50 ㎡	基壇

○発掘調査報告書刊行
第 85 集『沢尻遺跡』
第 86 集『高橋遺跡』
『令和元年度市内遺跡発掘調査事業概要報告書』

調査風景

4　文化財等保存維持・修理補助事業
・有形文化財保存修理２件（猿投神社山中観音堂ほか）
・有形民俗文化財保存修理１件（足助田町山車）
・無形民俗文化財保存修理１件（木瀬棒の手保存会）
・史跡名勝天然記念物保存整備１件（金剛寺シダレザクラ）
・文化財保存施設整備４件（道慈山観音寺仁王門ほか）
・有形民俗文化財保存維持 14 団体
・無形民俗文化財保存維持 25 団体
・伝統的郷土芸能保存維持 10 団体
・伝統的郷土芸能保存修理２件（枝下町打ち囃子保存会ほか）
・郷土の先人顕彰活動３件

5　史跡・名勝・建造物等整備・修理
・旧龍性院庭園支障木伐採及び石積保護（国庫補助事業）
・松平氏館跡支障木伐採（国庫補助事業）
・曽根遺跡公園露出展示排水改修
・大給城跡石積保全措置
・玄武岩囲い柵設置
・古瀬間城址法面崩落修理
・市場城址駐車場法面修理
・足助城柵列等修理
・百々貯木場桟橋修理

6　計画等策定
・（仮称）豊田市博物館新築設計（令和元～３年度）
・（仮称）豊田市博物館展示・収蔵環境等設計（令和元～３年度）

7　その他
・ニホンカモシカ滅失対応　51 件
・（仮称）豊田市博物館予定地における既存建物解体工事（令和２・３年度）
・（仮称）豊田市博物館に関わる市民周知
（イベント出展等　４件／ 5,287 人）

旧豊田東高校校舎お別れ会の様子

令和2年度 郷土資料館事業報告

1　展示・入館者数

令和２年度入館者数　8,692 人

・企画展「スペイン風邪とコロナウイルス」
（7/14 ～ 11/29）　4,236 人

・特別展「渡邉半蔵家－徳川を支えた忠義の槍－」
（1/30 ～ 4/11）　3,011 人

特別展の様子

2　資料調査

・旧鈴木家住宅古文書調査報告書
『紙屋鈴木家文書目録』（6,600 円）刊行

・小栗家等民具資料調査報告書
『小栗鉄次郎・生家 その暮らしの道具たち』
（1,100 円）刊行

3　資料収集・複製・修復

・考古資料：酒呑ジュリンナ遺跡等出土品　4 件
・民俗資料：若松辰治氏モーニング等　151 件
・歴史資料：地図資料等　1,250 件
・自然資料：ツキノワグマ等　595 件

4　資料貸出

・他館等への資料貸出（写真含む）　114 件

5　講座ほか

・子ども向け体験企画　長期休暇期間にあわせ　2 回
春 中止／夏 1,988 人／冬 527 人

・体験講座
（まが玉づくり講座 中止、まが玉の販売数 289個）

・よろいを着てみよう　中止

6　とよた歴史マイスター活動

・既認定者 72 人　活動参加者数　延べ 132 人

・マイスターが支援した博学連携への参加者数　539 人

マイスター活動の様子

7　郷土学習スクールサポート

・延べ 241 校／20,181 人の小中学生、特別支援学校が利用

スクールサポートの様子

8　近代の産業とくらし発見館

令和２年度入館者数　6,178 人

・企画展「まゆまつり 2020 ～稲武の養蚕～」
（5/19 ～ 7/5）　618 人

・企画展「開業 100 年 三河線挙母駅」
（10/23 ～ 3/7）　2,938 人

・企画展ギャラリートーク　２回

・講演会「名鉄三河線を語る～昭和の運転士・車掌～」

・ものづくり講座　中止

・ものづくり体験「かざぐるまを作ろう・間伐うちわ」、「お正月飾り・えと絵馬」等

・ぶらコロモ：年４回開催　（名木めぐり編、路地めぐり編、グルめぐり編、運気アップ編）

企画展「開業100年 三河線挙母駅」竹村駅付近を走る三河線車両

豊田市内に生息する魚類の
展示用標本が完成しました

豊田市郷土資料館（博物館準備室）では、令和 6 年（2024）の（仮称）豊田市博物館（以下、新博物館）の開館に向けて、市内で自然分野に関わる皆さんと共に、新博物館で展示する自然資料（標本）の充実化に取り組んでいます。この一環として、環境政策課、豊田市矢作川研究所と連携して、豊田市内に生息する 35 種類の魚類、2 種類の甲殻類の樹脂包埋標本を作製しました。

樹脂包埋標本とは、薬品処理した生物を樹脂に埋め込んだ特殊な標本のことです。生きているときの色や形を極力残すことができ、歴史資料とも一緒に展示できます。また、耐久性があるので、手に取って細部を観察できることも魅力の一つです。新博物館ではこうした標本の展示のほか、水槽展示ができる場所も計画しており、様々な方法で豊田市の川やそこに棲む生物達の面白さを紹介していけるように準備を進めています。

5 月からは「自然標本あつめるプロジェクト」と題して、昆虫、岩石をテーマに、市民の皆さんと一緒に地域の標本コレクションの完成を目指す活動がスタートしました。どんなコレクションが完成していくのか、また別の機会に活動の様子をご紹介していきたいと思います。

（酒井 博嗣）

●完成した樹脂包埋標本（一部）
豊田市の河川に生息する代表的な種類が揃いました。

●採集（調査）中の様子
標本にした生物はどれも市内の河川で実際に採集を行いました。

■豊田市郷土資料館利用案内■

開館時間　午前９時～午後５時
休 館 日　毎週月曜日（祝祭日は開館）、年末年始
入 館 料　無料（特別展開催中は有料）
交通案内　名鉄「梅坪駅」より南へ　徒歩 10 分
名鉄「豊田市駅」より北へ　徒歩 15 分
愛知環状鉄道「新豊田駅」より　徒歩 15 分
とよたおいでんバス「陣中町一丁目」より西へ　徒歩５分
駐 車 場　約 20 台

●豊田市郷土資料館だより　No.110

令和３年７月８日発行
編集・発行　豊田市郷土資料館
〒471-0079 豊田市陣中町1-21-2
TEL. 0565-32-6561　FAX. 0565-34-0095
E-mail● rekihaku@city.toyota.aichi.jp
URL● http://www.toyota-rekihaku.com
FB● http://facebook.com/toyotarekihaku

※豊田市郷土資料館だよりは、HP でもご覧いただけます。